奴らの玉を潰せ！ 後編

刑務所での暮らしというのは、こんなものだろうか。懲役刑だと家具を作ったりとか労働時間があるし、禁固刑でも庭の散歩くらいは許されているはずだ。ところが、僕はこの山小屋から出ることは禁じられている。弁当は、朝のサンドイッチ、昼はうなぎ飯、夜は幕の内と、一応、種類を違えているが、味気ないことはなはだしい。おまけに、会社から直接連れてこられたから、本もないし、テレビゲームもない。パソコンもない。

寝ころがっているしかないのだ。

ほかの部屋に入ってみようと思ったが、鍵がかかっていた。一階のロビーには、十年前の雑誌が転がっていた。それを読むしかなかった。あっという間に読みおえた。

夜が更けた。ウィスキーを飲んでベッドにもぐり込んだ。

翌日。

眼が覚めたら九時だった。佐伯紀子が持ってきたサンドイッチで朝食を済ますと、あとはお昼用のお弁当を食べるまでやることがないのに気づき、呆然となった。

紀子が来るのは明日。なんだか待ち遠しい。それまでの二十四時間をほこり臭い部屋でじっと過ごさなければならないかと思うと、ぞっとした。

ちょっとくらい外に出たっていいんじゃないか……。人目に付かなければいいのだから。
僕は、お昼のお弁当を持って、近くを散歩することにした。山道を少し歩くと、沼があった。沼のほとりでお弁当を食べ、煙草を吸った。いいお天気だった。僕は、下界での出来事についての現実感を失いつつあった。どうせ悪戯だ。睾丸を潰されてしまった加藤という男のことだって、ほんとうだかどうだか分かったもんじゃない。このまま、この山小屋に潜んでいれば、やがて普通の日常生活が戻ってくるに違いない。
一時間くらい、草むらに転がって昼寝をした。

夕方になり、山小屋に戻って部屋のドアを開けたとたん、僕は「あっ」と声をあげた。
佐伯紀子が立っていた。
「あ、あの……」
僕はどもった。
「来るのは、明日なんじゃ……」
「用が出来れば、来ます」
紀子は無表情でそっけなく言い、しかし内心の怒りを現すように、弁当を入れた紙袋を乱暴に机の上に投げだした。
「いや……決して人目につくようなところには行ってないから、すぐそこに沼があって、そこで

お弁当を食べていただけだから……」
言い訳をしてみたが、紀子は一切取り合わなかった。
「二時間お待ちしました」
「すいません」
僕はうなだれた。
「私は社命でここに来ています。あなたも社命に従って下さらなければ、業務に支障を来します」
「申し訳ない」
「どうも、切迫感が足りないようですね」
紀子は、苛立たしげに手にもった茶封筒を開き、コピー用紙を一枚抜き出して、僕の鼻先につきつけた。
今日の日付の『にっぽん・たいむず』だった。
「よくお読み下さい」

ＷＡＲニュース。二人目の処刑執行。
われわれＷＡＲの呼びかけに応えた三人の女性が、レイプ魔加藤貞夫の処刑を執行したと報じたばかりだが、今度は、二人の勇敢な女子高生が、少女売春の元締め・水沼修一に天誅を下した。

水沼は覚醒剤の常習者であり、盛り場等で誘惑した少女を覚醒剤中毒に陥れ、売春を強要していた。彼の毒牙にかかった犠牲者は十人を下らない。

裕子（仮名、以下同）と恵美は、某名門女子高校に通う名家の令嬢である。持ち前の正義感から、同じ年齢の少女を搾取する水沼の所業を許せなく思った二人は、目的遂行のために厚化粧をし、派手な衣服に身を固めて盛り場に赴き、情報を集め、ついに水沼の隠れ家を突き止めた。その捜査能力には脱帽の他はない。

水沼は、倒産した自動車修理工場をねぐらとしていた。裕子と恵美がそこに着いたとき、水沼の他に三人の仲間がいた。彼らはここで、誘惑した少女たちと乱交パーティを開き、覚醒剤の味を覚えさせたのだ。二人の女子高生は、仲間の三人にも同じ罰を下すつもりだった。

工場のドアを開けようとしたとき、背後から、『よお』と二人の青年が声をかけてきた。水沼の仲間だった。『遊びに来たのかい？』。二人の美少女の出現に、にたにたと笑う彼らに、裕子と恵美はにっこりと微笑んで油させ、目配せしあい、同時に股間を蹴りあげた。思わぬ攻撃。想像を絶する激痛に、膝をついて悶絶する二人の後頭部に手刀を見舞うと、二人は失神した。

工場に入り込むと、一人の青年がだらしなく壁にもたれ、自慰行為を行っていた。あきらかに薬でラリッていた。青年は二人の女子高生を見ると、剥き出しの生殖器をそのままに立ち上がり、近寄ってきた。

『修一はどこ？』

恵美が訊ねた。青年は階段をあがった二階の小部屋を指さした。裕子は背後から忍び寄り、青年の口をガムテープで塞いだ。青年は抵抗しようとしたが、恵美がむき出しの睾丸を三度、立て続けに蹴りあげると、白目を向いて失神した。

二人は階段をあがり、小部屋のドアを勢いよく開けた。水沼修一はソファにく座わり、まさに覚醒剤を吸い込もうとしていた。

『なんだ、お前ら』

二人が黙っていると、修一は青ざめた顔をがたがた震わせ、悲鳴をあげた。

『まさか、あの広告を見て……』

二人は微笑した。修一は怒鳴った。

『ざけんじゃねえ。女なんかに玉を潰されてたまるか。なめんじゃねえぞ』

修一は、いきなりナイフを引き抜き、横薙ぎに払った。刃は裕子と恵美の鼻先をかすめたが、二人は慌てなかった。修一は裕子に向かってナイフを突き出した。裕子は落ちついて身をかわし、突き出された腕をつかんだ。恵美が背後から股間を蹴りあげた。修一は呻き声をあげ、ナイフを取り落とした。恵美がもう一度、股間を蹴ると、修一は床に転がって悶絶した。

抵抗する力を失った修一を、二人は後ろ手にガムテープで縛りあげた。それから、修一の

ズボンを脱がせ、剥き出しになった生殖器に用意したガソリンを塗った。恵美が修一をはがい締めにして立たせた。裕子はライターに火をつけた。
『な、なにするんだ。よせ』
裕子は微笑み、ゆっくりと火を股間に近づけた。
『や、やめろ。やめてください。お願いです』
修一は半泣きになって叫んだ。裕子は、しっと唇に人指し指をあて、腫れあがった陰嚢を指で弾いた。修一は身も世もなく泣きわめき、懇願した。
『わ、悪かった。反省します。もうしませんから許して下さい。お願いです。や、やめてくれえ』
裕子は容赦なく、生殖器に火をつけた。修一は絶叫し、床を転がった。股間を必死で床にすりつけ、やっと火が消えたときには、ペニスも陰嚢も焼けただれていた。
もはや呻く余力もなく、ただ痙攣する修一の睾丸を、仲良く一つずつ握り潰してとどめをさした二人は、残る三人の処刑に向かった。
失神した三人を後ろ手に縛り、並べて工場の柱にくくりつけた。二人は、泣き叫び、哀願する三人の股間を、膝や爪先で蹴りあげ、完全に潰れるまで蹴り続けた。
二人は、われわれが期待した以上の成果をあげた。水沼と同様の人間の屑どもを四人も不能に陥れたのだ。二人には特別ボーナスをつけて、二千万円ずつが贈与される。

残るは横山博之ただ一人。女性たちよ。この男を許すな。世界の果てまで追い詰めて、ふさわしい罰を下せ！」

「わかりましたか？」
コピーを読みおえて、青ざめた表情の僕に、佐伯紀子は冷たく言った。
「こ、この記事って……、ほんとうのことなの？」
「ほんとうです」
紀子は眉ひとつ動かさなかった。
「さきほど、警察に問い合わせました。公表は控える方針のようですが、たしかに豊島区の某所の廃工場で、不能にされて瀕死の青年四人が発見され、病院に運ばれています。精神に異常を来しているため証言能力はないそうです」
「それは、やっぱりこの水沼って人？」
「そこまでは教えてくれませんが、間違いないでしょう」
佐伯紀子は、うなだれる僕に、冷やかな視線を送った。
「彼らのようになりたくなかったら、社命に従って下さい。わかりましたね」
僕は「はい」と答えるしかなかった。

奇妙なことに、恐怖は性欲を昂進させた。
僕はＷＡＲニュースを繰り返し読んだ。
急所を蹴られる激痛と、不能にされることへの恐怖を知っているだけに、潰されてしまった彼らの苦痛とショックの大きさは理解できた。とくに、水沼の側杖を喰うかたちで、縛られて身動きできぬまま残酷な少女たちに睾丸を蹴り潰された彼らの苦しみと恐怖はいかばかりであったろう。男にとって死刑に等しい罰を宣告され、時間をかけてなぶり殺されたようなものなのだ。
僕は、ＷＡＲニュースを読みながら、がたがたと体が震えるのを止められなかった。
ところが、震えが収まったとき、下腹部に異様な昂りを感じてしまう自分に気づいた。沸き上がった性欲は一人で処理するしかない。
佐伯紀子がやってきた翌日の夜、夢のなかに女性が現れた。徐々に目覚めながら、生殖器をまさぐっている自分に気づいた。はっと布団から跳ね起きて狼狽した。夢に出てきた女性は、佐伯紀子だったからだ。
佐伯紀子とは、会社でもろくに口を聞いたことがない。いや、同僚の間では、彼女は無口でとっつき憎いコという評価が固まっていた。飲み会の類には一切、顔を出さない。無能ではないが、自らと周囲の間に壁をはりめぐらせて、一切の進入を許さぬ気配があった。
「円山町あたりで男をあさってそうなタイプだよな」
口の悪い同僚が、佐伯紀子のことをそう表現したことがある。誰かが、けっこういいケツして

るもんな、と唱和した。胸もでかいって噂だぜ、という奴もいた。妻子ある上司と不倫してるかもしれねえよ、と言ったのは僕だった。
戦場で兵士による強姦がしばしば起こるのは、死に面した人間は集団保存の本能が強く働き、性欲が異常に高ぶるからなのだそうだ。それは、生き残ったという安堵感とともに、戦地の女性に向かって発せられる。日本兵が中国大陸で老婆や少女まで強姦したのは、とくに日本兵が残酷だったわけではなく、生物としての本能をうまく処理するシステム（たとえばアメリカ軍ならば女性兵士を婦人部隊として編成し、自由恋愛のかたちで兵士たちの性欲を発散させている）が機能しなかったせいだ。そんな文章を何かで読んだことがあった。
そういうことなんだ、と僕は自分を納得させようとした。僕は、ＷＡＲの標的にされたため、集団保存の本能が強く働いている。たまたま、佐伯紀子が唯一顔を合わせる女性だから、彼女に矛先が向かったからにすぎないんだ、と。
だが、お昼すぎに佐伯紀子が姿を現したとき、僕の視線は、きっちり着込んだスーツや膝下のスカートに覆われた彼女の胸や腰や脚にどうしても向かってしまうのだ。
「あのさ……」
内心をごまかすために、僕は口を開いた。
「その後、何か変化はあったの？」
「変化と言いますと？」

「たとえばさ……ＷＡＲってどんな組織なのか、とか」
「分かりません」
紀子はそっけなく言った。
「ただ、似たような事件が多発しています」
「似たような事件？」
「インターネットなどで、特定の男性を名指しして、この男を不能にしてくれという依頼が、さまざまな掲示板に書き込まれているんです。実際、不能にされてしまった男性もいるみたいです」
紀子は、茶封筒を差し出した。
「ある掲示板をプリントアウトしたものです。これをお読みになれば分かります」

ＣＨＡＫＯ　5・21・23:00
誰か、近藤悟という男の金玉を潰してくれませんか？　この男は、私の友人（処女でした）をレイプした上に、警察に訴えたら殺すと脅迫している卑怯な奴です。こういう奴は捕まっても、またシャバに出て同じことを繰り返すに決まっています。
お願いです。近藤の睾丸を潰してください。できれば女性に潰してもらえると嬉しいです。お礼はします。
近藤の住所は、埼玉県東野市矢田３・５・６です。

えみり　5・21・23:43
私がやってあげる。空手三段。寝技で押さえ込んで、金玉握りつぶしてあげる。
お礼ってなに？

ＣＨＡＫＯ　5・22・00:36
お礼はお金です。金額はここでは申し上げられませんけど、メルアドを教えてください。

ねたろう　5・22・02:13
なんだお前ら。ネカマか？

ＢＯＯＴＳ　5・22・03:13
ネカマだよ、決まってる。

えみり　5・22・04:30
ネカマとはなんだよ。お前らの金玉も潰してやる！

ＥＮＤ　5･22･05:27
やあい、本性を現してら。

ＢＯＯＴＳ　5･22･06:13
写真、見せろよ＾えみり

仁美　5･23･11:46
なにこれ？　例のＷＡＲってのと関係あるの？

石井猛　5･23･16:33
ＷＡＲは嫌いだ。男の敵だ。いずれ俺が潰す！

Ｈ・Ｋ　5･23･22:57
石井猛の金玉は私が潰す！

ひろし　5･24･00:17
僕の金玉を潰してください。

ＭＩＥ　5･24･01:36
なんだよ、こいつ？　変態、来るな、あっち行け！

仁美　5･24･02:04
潰してあげるから、住所教えなよ。

仁美　5･24･05:18
げっ、速攻メール来てやんの。ばあか

えみり　5･25･03:35
任務完了。
たった今、潰してきたぜ、近藤悟。
門のところで見張って、酔っぱらって帰ってきたところを後ろからはがい締め。
あとはガムテで口ふさいで、寝技に持ち込んで握り潰し。
悪が栄えた試しはないよ。

次郎　5・25・04:09

嘘つけ。証拠見せろ。

えみり　5・25・11:29

はい、証拠。

最後の発言には写真が貼られてあった。白目を剥いた男が下半身を裸にされ、大きく股を開いていた。陰嚢が異様に膨れあがっていた。

「すでに犠牲者は二十人にのぼっているそうです」

翌々日やってきた佐伯紀子は、感情を一切交えずに言った。

「みな、インターネットの掲示板で名指しされた男たちです。犯人はまだ見つかっていません。WARは、これらの事件とは一切関係がないという声明文を発表しています」

二十人も……？　僕は、かえって実感が湧かなかった。なかには、僕のように無実の罪で、たとえば、あいつ気にくわないから、というだけで掲示板に名前を公表され、犠牲になった奴もいるんだろうな、と思った。

ストーカーなどが腹いせに、相手女性の名前と住所を掲示板に書き込み、この女を強姦してく

れ、と書いた事件が起こっていることは知っていた。しかしながら、ターゲットが男性になり、しかも二十人もの犠牲者が出ているとは、予想もつかなかった。

「なんだかなあ……」

僕は溜め息をついた。

「恐ろしい時代だよなあ」

「そうですか？」

佐伯紀子が珍しく僕の言葉に反応した。

「そうじゃないか。新聞の広告にせよ、ネットの掲示板にせよ、この男の不能にしてほしい、なんて呼びかけに答えてほんとうに男を不能にしてしまう女性が現れるなんて、信じられないよ」

「女性は常に被害者の立場であるのが普通だということですか？」

僕はたじろいだ。佐伯紀子の眼が光っていた。こいつ、まさかフェミニストじゃないだろうな。

「いや、別にそういう意味では……」

「それだけ、怒りを溜めていた女性が多いってことじゃないですか」

「そうかなあ……。女性に気を遣って我慢している男性だって結構多いと思うよ」

「鈍感なのね」

佐伯紀子は不敵な微笑を残して去っていった。

いかん……。

明け方、目を覚ました僕は、汗びっしょりの体をタオルで拭った。

ここのところ、三日つづけて、佐伯紀子とセックスする夢を見た。

入社以来、これほど強く彼女の存在を意識したことはなかった。集団保存の本能で説明しても仕方がない。心のどこかで彼女と寝たい、と望んでいることは事実としか言いようがない。

僕は起き上がり、窓の外を見た。朝靄が緑の樹海を覆い隠していた。ペットボトルの水をラッパ飲みした。やっと落ちつくことができた。

一昨日、ＷＡＲが新たな標的三人を発表した。三十六歳の痴漢常習犯。五十三歳のセクハラ上司。十九歳の盗撮マニア。たしかに女性にとっては迷惑な存在だろうが、去勢しなければならぬほどの罪状だろうか。

鈍感なのね、と佐伯紀子は言った。たしかに男性には、女性に与えるセクシャルハラスメントについて理解の足りない部分はあるだろう。だが一方で、女性にもてる男というのは、どこかで女性を軽蔑していたりするのだ。女性を対等な存在として扱おうとしているときにはもてなかった、女性を見下すようになってからもてるようになった、というエッセイを書いた学者がいる。そういう傾向は否定できないのではないか。

もてる男は何をやってもセクハラにならない。一方、もてない男のちょっとした性的なシグナルは嫌悪の対象になる。これは逆差別ではあるまいか。実際、ＷＡＲが標的に定めた男性は、もてそうもない男ばかりじゃないか。

もてない男にも性欲はある。性欲をもてあました挙げ句、犯罪行為に走る男の哀しさを女性は理解するだろうか。女性だって鈍感じゃないか。

僕の思考は混乱していたに違いない。話し相手がいないからだろう。最近、僕は独り言が多くなった。昂りっぱなしの性欲を抑えつけるための行為でもあった。

要するに、俺の本音は詰まるところ、佐伯紀子とやりたい、それだけじゃないのか。

そう口に出してみて、僕はたじろいだ。

「痩せましたね」

いつものように昼過ぎに現れた佐伯紀子は、事務的に弁当の空箱を回収し、新しい紙袋を部屋の隅に置いて、茶封筒を文机に置いた。

「山崎という男の処刑が執行されたそうです」

ＷＡＲが新たに指名した標的の一人、五十三歳のセクハラ上司だ。早朝、公園のトイレで素っ裸で発見された。潰された睾丸が口に詰め込んであったという。手口がしだいに残酷になっている。だが、僕は上の空で聞いていた。

夏の訪れを思わせる暑い日が続いていた。佐伯紀子は、ノースリーヴのシャツに膝上のスカートだった。薄い生地が、彼女の体のラインを際立たせていた。

たしかに、腰からヒップにかけてきれいなラインを描いている。胸も、なかなか大きそうだ。足首が細い。

佐伯紀子が口を噤んだ。僕ははっとした。息が乱れていた。

「どうしたんです？」

彼女は不審そうに僕を見た。

「あのさ……」

僕は狼狽を隠しながら言った。

「まだ事件は解決しそうにないの？」

「そうですね。警察は必死で捜査しています。昨日、加藤貞夫を処刑した容疑で一人の女性が逮捕されましたが、どうやら誤認逮捕のようです」

「じゃあ、僕はまだまだ当分ここで……」

「社命です」

紀子は冷たく言った。

「よせよ」

僕は思わず大声を出した。

「その社命ってのは……息が詰まりそうだ」

僕は立ち上がり、部屋をぐるぐる歩き回った。

「だいたい、こんな、山奥で、一人じっとしていろなんて……馬鹿げてるよ。僕は何もしていない。ＷＡＲが言っているような、女性に乱暴を働くような男じゃないことくらい、社だって知っているはずじゃないか」

「今のところ、あなたが交際した女性に暴力を振るった証拠は出ていませんね」

紀子は眼鏡の位置を正して言った。

「当たり前だ！」

僕は怒鳴り、それからきっと彼女をにらんだ。

「君は、僕の身辺も調査しているのか？」

「社命ですから」

「だから、その社命ってのはよせと言ってるんだ！」

弁当がまずい、酒はウィスキーばかり、部屋は古くてカビ臭い、トイレがたびたび詰まる、テレビくらい入れろ、暖かいご飯が食べたい……。僕は苛々して怒鳴り散らした。積もり積もった不満をすべてぶちまけた。一方で、佐伯紀子を前に取り乱している自分に驚いてもいた。なにごとも笑顔で受け止める、それが僕の処世術じゃなかったのか。

「ご要望はそれだけですか？」

怒鳴りすぎて咳き込んだ僕に、紀子は言った。僕は紀子を見た。彼女は手帳を左手に置いて、僕の怒号を事務的にメモをとっていたのだ。僕は彼女を憎んだ。僕を、こんな不条理な状態に追

い込んだもの全てを体現しているように感じた。
次の瞬間、僕は彼女に詰め寄り、両肩をつかんで乱暴に揺すぶっていた。佐伯紀子は眼を見開き、呆然と口を開けて僕を見つめていた。僕は彼女を突き飛ばした。彼女は壁に背中をぶつけ、よろめいた。眼鏡が床に落ちた。
や、やべえ。
僕は狼狽していた。生まれて初めてだ。他人に暴力を振るったのは……。
だが、僕の内心の狼狽とは無関係に、体が動いていた。僕は彼女の胸ぐらをつかみ、激しく揺すぶっていた。
「ぐっ！」
僕は呻いた。股間に激しい衝撃が走った。
佐伯紀子が僕の股間を膝で蹴り上げたのだ。
あの激痛が、下腹部から頭頂に突き抜けた。続いてもう一撃。呼吸が詰まった。全身の筋肉が硬直し嘔吐がこみあげた。
僕は、股間を両手で抑えて、床にしゃがみこんだ。激痛が全身をかけめぐった。眼に涙が溢れた。腹部が内臓を掴みだされるように引きつった。
やっと顔をあげた。佐伯紀子が壁にもたれて、荒く胸を上下させていた。眼鏡をはずした彼女は、きれいな眼をした整った顔だちだった。髪の毛が乱れてい、ほつれた後れ毛と白い顔に浮かぶ汗の粒が、妖しげな雰囲気を醸し出していた。
紀子はしばらく息も荒く僕を見つめていたが、やがて、用心深く眼鏡を拾った。
「このことは……社に報告します」
口調は冷静だったが、紀子の眼は憎悪に満ちていた。彼女は身を翻して外に去り、ぴしゃりとドアを閉めた。
取り残された僕は、床につっぷして号泣した。

クビかな……。
翌々日、眼を覚ますと、やっと痛みが引きかけていた。佐伯紀子はもうやってこないだろう。代わりの者が派遣され、社の命令を僕に伝えるだろう。子会社への出向を命ぜられるか、それとも自発的依願退職を示唆されるか。
それもいいかもしれない。ＷＡＲが警察に摘発され、危険が去ったとしても、僕はもう社には戻れない。周囲の冷たい視線に耐えきれず、自ら辞表を書く羽目になるだろう。子会社への出向ですんだらしめたものだ。この不況に、職を失わずにすむ。
もっとも……佐伯紀子にあんな行為を働いたとしたら、社はＷＡＲが書いたことを信じるようになるかもしれない。やっぱりクビかな。
不思議と焦燥はなかった。やけっぱちになっていたのかもしれない。

僕は起き上がった。体を動かすと睾丸に鈍い痛みが走った。僕は紙袋からサンドイッチを取り出して食べた。

乾燥したパンを咀嚼しながら、このまま、山小屋を出ようか、と考えた。失踪。同僚を殺したホステスが十五年間も警察の眼を逃れて潜伏した例もある。どこか、誰も僕を知らないところで、生きていくことは出来ないだろうか。

サンドイッチを食べおえ、僕はドアを開けた。久しぶりに外を散歩することにした。

ぶらぶらと山道を歩いた。睾丸は少し痛んだが、頬を撫でる風が心地よかった。沼のほとりに寝ころがった。草の匂いが鼻をついた。

俺はいま自由なんだな、と思った。もはや、社の意向を気にすることもない。何かを失うことは、引換えに自由を得ることかもしれない。

穏やかないい日和だった。いい気分だった。佐伯紀子も、社も、ＷＡＲも、糞食らえだ。

僕は、昼のお弁当を食べて、山小屋に戻った。ドアを開けた。人が三人いた。

「おかえり」

室内にいたのは、佐伯紀子と、見知らぬ女性二人だった。ベッドに腰かけておしゃべりしていたらしいが、僕を見るといっせいに立ち上がった。紀子は私服だった。ノースリーヴのサマーセーターに、ジーンズのミニスカート。髪の毛をいつの間にか茶色に染めていた。眼鏡はしていな

かった。

他の二人は紀子と同年輩だろうか、黒いＴシャツにロングスカートでポニーテールの長身の女性と、青系統の花柄のワンピースにロングヘアの小柄な女性。僕を見て、にやにや笑っている。

「タマの具合はどう？」

紀子が訊ねた。いつもの事務的な口調と違って、嘲りをこめた馴れ馴れしい声だった。他の二人が哄笑した。

どういうことだ……。

僕は呆然と立ちすくんだ。わけがわからなかった。紀子が微笑みながら僕に近寄った。僕は反射的に脚を閉じていた。

次の瞬間、眼から火花が飛んだ。佐伯紀子が平手打ちを喰わせたのだ。僕は、両手で顔を覆ってよろめいた。脚が不覚にも開いた。続いて、紀子の膝が突き上げられた。正確に僕の睾丸を三度、蹴りあげた。

女性たちがまた手を叩いて哄笑した。股間を抑えて仰向けに転がり、涙を流しながら体を左右に揺らして悶絶する僕を指さして笑っていた。屈辱を感じる余裕はなかった。

激しい痛みに思考が麻痺していた。

両手の上から股間を踏みつけられた。僕は悲鳴をあげた。涙でぼやけた視界の先に、佐伯紀子が立っていた。僕の股間を踏みつけて、せせら笑っているのだ。

「紹介するね。こちらは木村恵利子さん。こちらは村野久美さん。インターネットのチャットで知り合ったの」
二人の女性は、おどけた仕草で深々と挨拶した。
「な、なんのつもりだ……」
僕は必死に声を振り絞った。紀子は平然と言った。
「これから、三人であなたの睾丸を潰すの」
わっと僕は叫んだ。
「や、やめろ……、そんなことをしたら」
「会社には辞表を出した。明日、私の代理の人がここに来るはずよ。そのときまで生きていれば、命は助かるはずよ」
紀子は股間を踏みつけた踵に力をこめた。左手の指の骨が折れる音がした。圧力が直接、睾丸にかかった。全身を激痛がかけめぐった。僕はもはや叫ぶ気力もなく、身を捩って泣き叫んだ。
「三人で話し合ったの。もう世知辛い会社勤めはたくさん。もっと自由に、生き甲斐のある仕事をしたい。長野に安いペンションの物件が出ているの。見にいったらとてもいい場所だった。値段は二千五百万円。あなたの睾丸を潰してＷＡＲから三人ぶんの報酬を貰えば、手数料その他を含めてちょうどの金額よ。三人とも貯金はあるから、回転資金にも事欠かない。そういう話が半月前に出たけれど、私は躊躇してた。あなたが女性に暴力を振るうような男には見えなかったし、

そんな証拠もなかった。決心がついたのは二日前、あなたが私に乱暴したとき」
僕は必死で口を動かした。だが、言葉にならなかった。
「あれで吹っ切れた。もう歯車にはならない。ほんとうの自分だけの人生を生きていくつもりよ」
紀子が睾丸から足を離した。僕は、体を丸め、折れた手首を腿に挟んでのたうちまわった。口のなかに苦いものが溢れていた。
「さっさとやっちゃおう」
紀子が二人をうながした。抵抗する力は残っていなかった。僕は、長身の木村恵利子にはがい締めにされて立たされた。小柄な村野久美が目の前に立った。
村野久美の足の甲が股間にたたきつけられた。熱を帯びてわなないていた睾丸が一瞬平たく変形した。股間に焼けた棒をつっこまれたように、下腹部全体に灼熱の炎が渦巻いた。視界は完全に閉ざされ、全身の筋肉が激しく痙攣した。胃袋が引き裂かれたようにひきつり、どす黒い固まりが喉へと噴き出した。
三度目の蹴りまでは意識があった。それから後は何も覚えていない。
眼を覚ましたら、僕は病院のベッドにいた。個室だった。包帯をぐるぐる巻かれた左手が壁から釣り下げられていた。
喉がいがらっぽかった。脳は靄がかかったようにぼんやりしていた。なんで、僕はこんなとこ

ろにいるんだろう。

やがて靄が霽れはじめた。記憶が蘇ってきた。そうだ。佐伯紀子……。

僕は、折れていない右手で自らの股間をまさぐった。

ない。

ペニスも陰嚢もなかった。

僕は、もう男ではなくなっだのだ。

受け入れがたい事実を、やっと認めたとき、僕の全身はがたがたと震えはじめた。頭に血が昇った。嗄れた悲鳴が迸った。意識がすーっと遠のいていった。（２００１・05・08）